

# 米国の保育にみる文化的多様性の意義

— マイノリティの子どもたちを中心に —

管 田 貴 子

(2006年10月5日受理)

The significance of the cultural diversity in the United States  
for minority children in childcare

Takako Kanda

The aim of this paper is to review the researches on the cultural diversity in the United States, especially in childcare. In this paper, the researches on childcare for minority children were divided into four categories; the researches about the relationship between teachers and minority parents, teachers education, education and educational resources for minority children, and welfare for minority children and their families.

Through reviewing them, the problems of teachers' assumptions and the importance of discussions about teachers' competencies to educate minority children and to communicate with their parents were suggested. Teachers' attitudes to respect the cultural diversity toward minority children and their parents were needed in childcare.

Key words: cultural diversity, the United States, childcare, minority children

キーワード：文化的多様性、米国、保育、マイノリティの子どもたち

## 1 はじめに

外国人登録者数が平成15年に約191万人と過去最高を記録したわが国では<sup>1)</sup>、出生する子どもの約35人に1人が父母の一方または双方が外国籍であることが報告されている(渋谷, 2006)。少子化が進み、父母双方が日本国籍の子どもの減少が進むわが国において、このように多様な文化的背景をもつ子どもの増加は今後も続くものと思われる。

日本では幼児期を日本で過ごす外国籍の子どもの増加にともなって、1980年代の終わり頃から多様な文化的背景をもつ子どもを対象とした研究が始まったが、異文化間教育のなかで幼児の問題に着目した研究はいまだ少ない(山田, 2006; 廿日出, 2006)。しかしながら、異なった文化的背景をもつ子どもたちの「成長上のつまずきや発達阻害といった文化的な不適応」は大きな課題になっている(松尾, 2006)。全国では約2割の保育所において外国籍の子どもの保育が行われ

ているが(渋谷, 2006)、このような課題を前に保育者は、多様な文化的背景をもつ子どもとは「特別な配慮の必要な子どもである」という認識をもつことが求められている。

このような子どもたちの日本での保育を考えるうえで、比較的早くから移民問題を抱えた米国における保育のガイドラインや、マイノリティの子どもの保育に関する研究は参考になるだろう(山田, 2006)。本稿においてマイノリティの子どもとは、文化的マイノリティの子どもを意味する。

本稿の目的は、米国でのマイノリティの子どもの保育に関する研究を概観することを通して、保育現場におけるマイノリティの子どもに対する具体的な配慮事項や目指される保育内容、保育者の役割について得られている知見と課題を検討し、日本における多様な文化的背景をもつ子どもの保育に示唆を得ることである。

## 2 移民の子どもの増加

米国では米国生まれの労働者が不足しているため、労働力を外国人労働者が充足しており、さらに5人以上の家族を持つ外国出身者の世帯数は米国生まれの世帯よりも多いことから移住者が増加している（内多, 2002）。家族とともに移住する外国人労働者の増加にともない、米国の教育現場では様々な文化的背景をもつ子どもが急激に増えている。2000年に米国の都市ニューヨークでは、市民の36%が国外で生まれ、ニューヨーク市内の学校に通う子どもの48%が移民の子どもであった（Milstein & Lucic, 2004）。またカリフォルニア州では、公立学校に通う子どもの16%が国外で生まれおり、約4人に1人が英語を母語とせず、このような子どもは毎年増加している（Olsen & Mullen, 1990）。

米国で教育を受ける子どもの文化的背景が多様になるに従って、米国ではマイノリティの子どもの保育やその保護者を対象とした研究が進められてきた。

## 3 マイノリティの子どもに関する研究

マイノリティの子どもに関する研究では、マイノリティの子どもを対象とした教育内容の検討をはじめとして、保育や教育にあたる保育者・教育者の役割や保育者の教育について、さらには保護者と保育者との関係にも議論が及んでいる。

マイノリティの子どもが就学前施設で保育をうけるためには、入所前にその保護者が保育者とコミュニケーションをとり、就学前施設を選択する。そして入所後もマイノリティの保護者と保育者とのやりとりを基盤にして、マイノリティの子どもの保育は進められる。

よってはじめに本稿では、「マイノリティの保護者」に関する研究を取り上げる。次いで、マイノリティの保護者との円滑なコミュニケーションが求められる「保育者のための教育」に関する研究に注目する。さらに「マイノリティの子どもの教育」に関する研究から、マイノリティの子どもに特徴的で必要とされる配慮事項や保育・教育内容について得られた知見を述べる。最後に子育て支援へとつながる「マイノリティの子どもとその家族の福祉」に関する研究について検討する。

以下これらの研究を順に整理し、その特徴と課題を示す。

## 4 マイノリティの保護者

マイノリティの子どもの保育を考える上で、保育者とマイノリティの保護者が連携していくことの重要性は多く指摘されている（Greenberg, 1989; Bermudez, 1993; Deborah, 2001など）。なぜならば、保育者とマイノリティの保護者とは、価値観や子どもの教育において優先する事柄が同じとは限らないからである（Milstein & Lucic, 2004）。

### (1) 就学前施設を選択

マイノリティの保護者はわが子が入所する就学前施設を選択するとき、就学前施設で行われる保育実践が保護者の信念と一致するか、また子どもが家庭で経験することと就学前施設で経験することとは類似しているかを基準に選択する傾向がある（Wise, 2002）。

マイノリティの保護者がこのような配慮をして就学前施設を選択してもなお、入所後には保育者とマイノリティの保護者との間で葛藤が起こりやすい。保育実践は保育者のもつ信念や価値観、保育目標とつながりが深い、その実践がマイノリティの保護者の価値観と異なる場合には、マイノリティの保護者から保育者に伝えていかなければ理解しあうことは難しい（Gonzalez-Mena, 2005）。しかし実際には、マイノリティの保護者は保育者という保育の専門家に対して母語ではない英語で自身の意見を告げる自信がない上に、保護者は多忙であったり、保育者が文化的多様性に鈍感であったり敬遠したりすることが重なって、マイノリティの保護者の思いが保育実践に活かされることは少ないのである（Bermudez, 1993）。幼児をもつ韓国籍・中国籍の保護者とその保育者にインタビューしたLahman & Park（2004）によれば、韓国籍・中国籍保護者はわが子の英語獲得と母文化保持との間で悩む一方で、保育者は韓国籍・中国籍の保護者とコミュニケーションをとって、保育に参加してもらう方法に苦慮していた。これらの研究から、マイノリティの保護者と保育者とがそれぞれに連携の難しさを認識しており、現実的に両者の連携はうまくとれていない状況がうかがえる。

### (2) マイノリティの子どもの移行の課題

マイノリティの保護者と保育者間で連携がうまくいかないまま、それぞれが異なった教育目標をもって子どもたちの保育にあたった場合、子どもたちは2つの文化を保持しながら自己を形成していく過程において困惑することが指摘されている（Gonzalez-Mena, 2005）。家庭と就学前施設において文化や使用する言

語が異なる場合、マイノリティの子どもは家庭で習得したことを基にして就学前施設の生活に適應していくことが難しく、家庭から就学前施設への移行に困難を示すのである (Saracho & Spodek, 1995)。マイノリティの子どもの教育や発達のためにも、保育者とマイノリティの保護者とが連携していくことは重要であるといえる。

### (3) 連携の方法

保育者とマイノリティの保護者とが連携をはかるための具体的な方法としては、個別面談だけではなく、複数の保育者や保護者が参加するカンファレンス (Koch & McDonough, 1999) も考えられる。マイノリティの保護者がカンファレンスに参加するためには、場合によって通訳者を依頼することが必要になるが、保育方針や保育実践についての保育者の考えを保護者が知る機会となりうる。さらに保護者同士が知り合うことで情報を交換し、異なった文化的背景について互いに理解を深める機会となるだろう。マイノリティの保護者のカンファレンスへの参加や、カンファレンスで取り上げる内容や意義についても、今後検討が求められる。

しかしながら、保育者がマイノリティの保護者と面談したり、カンファレンスを開けば保育者とマイノリティの保護者との連携がとれるというものではないだろう。連携をはかるための鍵となるのは、保育者がマイノリティの保護者とコミュニケーションをはかる能力をもつことであり、そのなかで保育者が多様な文化的背景を尊重する態度を示すことである。そしてそのような能力や態度を保育者がもつためにも、保育者に対する教育やトレーニングが注目されている。次にこの保育者の教育に関する研究を見ていきたい。

## 5 保育者の教育

米国ではマイノリティの子ども保育にあたる保育者の教育やトレーニングについての研究は多く、その関心の高さがうかがえる (Byrnes, Kingler & Manning, 1997; Gonzalez-Mena & Bhavnagri, 2000; Kieff & Wellhausen, 2000など)。

保育者の教育に関する研究の特徴として、保育者が多様な文化について一方的に「仮定 (assume)」することの問題点や、保育者が多様な文化を「尊重 (respect)」することの重要性を指摘していることが挙げられる。

### (1) 保育者がもつ「仮定」

保育者が「仮定」する事柄としてはまず、マイノリティの保護者は米国の幼児教育について理解していると「仮定」することがある。Deborah (2001) は、マイノリティの保護者は米国の幼稚園や小学校教育のシステムをよく知らないため、わが子が幼稚園や小学校でどのようなことを期待され、保育者や教師は子どもたちにどのような方法で教育目標を達成させるのかを理解していないと指摘する。保育者は「あたりまえ」と思い、説明する必要性を感じていないような保育方針や保育目標、保育カリキュラムについても、マイノリティの保護者にとっては「あたりまえ」ではなく、必要な情報であることを認識しなければならない。国によって異なった保育制度や保育指針があり、それらに基づいて日々実践されている保育をマイノリティの保護者の立場に立って見直し、マイノリティの保護者に理解してもらうように保育者は伝えていく必要がある。

さらに保育者はマイノリティの子どもやマイノリティの保護者の外見から、彼ら／彼女らのもつ文化的背景を「仮定」して接しており、マイノリティの子どもやその保護者の外見が保育者と似ている場合には、保育者が文化的多様性を「尊重」することは難しくなると指摘されている (Gonzalez-Mena, 2005)。すなわち保育者がマイノリティの子どもや保護者の容姿から、文化的背景や価値観を推測し、保育者のステレオタイプに基づいて保育にあたることの危険性を述べている。そこには容姿という一面的な情報に頼ることで、個々のマイノリティの子どもや保護者を理解しようとしない保育者の認識の問題が浮かび上がる。

### (2) 保育者による文化的多様性の「尊重」

Gonzalez-Mena & Bhavnagri (2000) は、多くの保育者が多様な文化的背景を受けとめるような教育をほとんど受けておらず、マイノリティの保護者の振る舞いを理解しようとするのではなく、ただマイノリティの保護者が「変わる」ことを望むと述べる。すなわち様々な文化を「尊重」といった保育者の認識が薄いのである。保育者がマイノリティの保護者をどれだけ「尊重」するかが、就学前施設におけるマイノリティの子どもの態度にも表れることが指摘されており (Greenberg, 1989)、保育者が文化的多様性を「尊重」することの重要性がいえる。

保育者が文化的多様性を「尊重」する態度を身につけるためには、保育者自身が異なった文化に対して偏見をもつことを自覚し、偏見を克服することが求められる (Rhonda, 1999)。具体的に米国では、保育者が

自身のもつ偏見を内省した上で多様な文化的背景をもつ子どもの保育にあたるための方法として、アンチバイアス・カリキュラムが実践されている(管田, 2005)。

### (3) 保育者に求められる「能力」

多様な文化的背景をもつ子どもの保育にあたる保育者に求められる「能力」(competency)として、Olsen & Mullen (1990) は次の4つを挙げる。それらは、①子どもの言語発達を援助する能力(第二言語獲得過程の知識とその過程で子どもを援助する技術をもつこと)、②多様な文化を取り入れたカリキュラムを作成し実践する能力(カリキュラムに多文化、移民、偏見といった視点を取りこむために様々な文化や歴史に関する教材に幅広く親しんでいること、生徒の経験した事柄や経験するだろう事柄について教えること)、③多様性の理解を援助する雰囲気をつくる能力(個々のもつ偏見の探求の場として教室を活用する知識をもつこと)、④子どもの文化的背景についての知識(政治、歴史、経済などを含めた子どもの文化的背景に関する知識をもつこと)である。

### (4) 「尊重」と「能力」という用語の問題点

前述した保育者の教育に関する研究においては、多様性の「尊重」(respect)や多様性を理解する保育者の「能力」(competency)という用語が多く使用されていた。

しかしこの用語について、問題を提起する声もある。Hoskins (1999) は、多様性の「尊重」という言葉には、受容や敬意ではなくて判断や承認の意味が含まれており、保育者の「能力」と言えば、一度ある特定のスキルを習得すれば堪能であると見なす点で異議を唱える。すなわち、保育者がマイノリティの子どもや保護者の経験を理解する「能力」をもつと言うと、保育者は個々の子どもや保護者が独自にもつ経験の意味を熟考することなく、一定の知識から解釈してしまうような意味合いが含まれると述べる。確かに、多様な文化的背景をもつマイノリティの子どもの保育にあたり、マイノリティの保護者と連携する保育者に必要な「能力」とはどのようなものであり、何によってその「能力」は評価されるのかは曖昧で、十分に検討されないままに「能力」という用語が使用されていると言えよう。保育者の教育を考える上で、マイノリティの子どもの保育にあたる保育者に求められる「能力」や、その「能力」の評価の問題についてはさらなる研究が必要であると考えられる。

保育者の教育に関して課題は残されているものの、保育者の教育を通して保育者が自身のもつ偏見と向き

合い、マイノリティの子どもや保護者のもつ文化的背景に敬意を表すといった態度をもつことは意義がある。このような態度を保育者がもつことは、保育者がマイノリティの子どもの教育内容を再検討し、教材を充実させていくきっかけになるのではないかと考える。

次に米国では、マイノリティの子どもの教育に関してどのような研究が進められてきたのかを見ていく。

## 6 マイノリティの子どもへの教育

様々な文化的背景をもつ子どもに対する教育としては多文化教育が目ざされ、多くの研究が見られる(Banks, 1989; バンクス, 1999; Elsworth, 1999; Kaiser & Rasminsky, 2003; ゴンザレス-メーナ, 2004など)。またマイノリティの子どもの保育に関しては、就学前施設におけるバイリンガル教育に関する研究(Bayley, 1996; Byrnes, Kiger, & Manning, 1997など)や、幼児の人種概念の確立について検討する研究(ノイゲパウエル, 1997)など内容は多岐にわたる。ここでは特に保育現場でのマイノリティの子どもの教育において「保育者が果たす役割」と、幼児期の重要性が指摘されるマイノリティの子どもの「自尊心」について焦点をあてる。

### (1) マイノリティの子どもへの教育に保育者が果たす役割

具体的にマイノリティの子どもを保育する保育者が果たす役割としては、マイノリティの子どもを含めたすべての幼児に多様性の価値、偏見や差別に抵抗することを教え、幼児がもつ個々の違いに関する疑問に答えていくことがある(Pulido-Tobiassen & Gonzalez-Mena, 2005)。そして保育者は、マイノリティの子どもに高い期待をもちながら、マイノリティの子どもが自尊心を高めていくように援助することが求められる(Olsen & Mullen, 1990)。

特に保育者が配慮すべき事柄としては、就学前施設における友だち関係が挙げられる。Johnson, Ironsmith, Snow, & Poteat (2000) は、就学前施設において他児に受け入れられた経験をもつ子どもは就学後の学校生活にも適応しやすく、学力や社会性の発達にも影響が出ると指摘する。すなわち、マイノリティの子どもが他児からどのように受け入れられるかによって就学後に影響が出るならば、マイノリティの子どもとの友だち関係を援助していくことも保育者の重要な役割である。

## (2) マイノリティの子どもの自尊心

子どもたちの自身心を高めることを目的の1つとする多文化教育は、子どもたちが自身の人種や民族についての知識や誇りをもつことにより、自尊心を形成していく点を重視しているが、この点が問題視されている。Wardle (1998)によれば、研究者は子どもたちがアフリカン・アメリカンやアジアン・アメリカンといった1つの集団に属することを前提として多文化教育を発展させてきたが、両親の文化的背景がそれぞれ異なり、複数の人種や民族に属する子どもたちはどの集団にも属することができずにいるという問題が起きているのである。

異なった文化的背景をもつ者同士の結婚が増加し、複数の人種や民族に属する子どもが増えるなか、保育者は彼ら／彼女らの自尊心を1つの人種や民族に属するといった意識に頼らずに高めていくような援助方法や教育内容について、議論していく必要があると言える。

## 7 マイノリティ家族の福祉

マイノリティの子ども保育を考えるためには、マイノリティの子どもを取り巻く環境や福祉についても目を向けることが重要であろう。

Shu-Minutoli (1995)は多様な文化的背景をもつ家族に対する具体的な支援サービスの内容を挙げている。それらは様々な言語やコミュニケーションスタイルに配慮して信頼関係を構築した上で、様々な情報を提供していくことのほか、子どもや保護者に対する教育や訓練、カウンセリングやセラピーによる援助、交通手段・家の修復・保険に関する援助など、生活全般に渡る様々な援助である。

わが国では近年、外国籍保護者に対する子育て支援として保健医療サービスにおける通訳の配置(伊藤・中村・小林, 2004)や、保健医療に関する外国籍保護者のニーズや問題点の検討などの研究が見られ(中村, 2003)、多様な文化的背景をもつ子どもやその保護者の福祉にも目が向けられてきている。今後わが国の子育て支援においては、このような保護者の増加により、子育て支援の対象としてますます注目されていくだろう。

米国に見られるようなマイノリティの子どもとその家族のニーズや、多岐に渡る具体的な支援内容についての検討が、わが国でも今後さらに求められていくだろう。

## 8 まとめと今後の課題

米国におけるマイノリティの子ども保育に関する研究では、マイノリティの子ども教育にとどまらず、保育や教育を担う保育者に対する教育や、マイノリティの保護者との連携、さらには福祉サービスといった包括的な内容について取り上げられていた。本稿ではこれらの研究を、マイノリティの保護者との連携、保育者の教育、マイノリティの子ども教育、福祉サービスの4つに分類したが、これらはどれも密接に関連している。つまりマイノリティの子ども保育を実践していく上で、4つのうちのどれか1つが充実すれば良い保育ができるということではなく、それぞれについて保育者は取り組み、検討を加えていくことが重要である。

異なった文化的背景をもつ人々とかかわりをもつ利点として、自分たちがもつシステムを知る機会を得ることがある(Gonzalez-Mena, 2005)。これはマイノリティの子ども保育にあたる保育者にとっては、日々の保育実践や自分にとって「あたりまえ」のシステムを振り返る機会をもつことを意味する。また、保育者とマイノリティの子どもやその保護者とがかかわり合い、相互的に教えあう機会がつけられることで、新たな気づきが生まれるという点においても意義がある。

日本においても、様々な文化的背景をもつ子どもを保育することで得られる利点を、保育者が認識していくような方法について検討していく必要があると言える。

### 【注】

- 1) 法務局入国管理局 平成16年版出入国管理

### 【引用文献】

- Banks, C. A. M., 1989 Parents and Teachers: Partners in Multicultural Education. In J. A. Banks & C. A. M. Banks (Eds.), *Multicultural Education: Issues and Perspectives*. Boston: Allyn and Bacon.
- バンクス 平沢安政(訳) 1999 入門多文化教育—新しい時代の学校づくり— 明石書店 (Banks, J. A., 1999 *An Introduction to Multicultural Education*, 2<sup>nd</sup> ed. Boston: Allyn and Bacon.)
- Bayley, R., 1996 Strategies for Bilingual Maintenance: Case Studies of Mexican-Origin Families in Texas. *Linguistics and Education*, 8, 389-408.
- Bermudez, B. A., 1993 Teaming with Parents to

- Promote Educational Equality for Language Minority Students. In F. N. Chavkin(Ed.), *Families and Schools in a Pluralistic Society*. Albany: State University of New York Press.
- Byrnes, D. A., Kiger, G., & Manning, M. L., 1997 Teachers' Attitudes about Language Diversity, *Teaching and Teacher Education*, 13(6), 637-644.
- Deborah, E., 2001 Parent Involvement: It's Worth the Effort, *Young Children*, July, 65-69.
- Elswood, R., 1999 Really Including Diversity in Early Childhood Classrooms, *Young Children*, July, 62-66.
- ゴンザレス-メーナ 植田都・日浦直美 (訳) 2004 多文化共生社会の保育者 北大路書房 (Gonzalez-Mena, J., 1993 *Multicultural Issues in Child Care*, 3<sup>rd</sup> ed. Mayfield Publishing Company)
- Gonzalez-Mena, J., 2005 *Diversity in Early Care and Education: Honoring Differences*, 4<sup>th</sup> ed. New York: McGraw-Hill Higher Education.
- Gonzalez-Mena, J., & Bhavnagri, P. N., 2000 Diversity and Infant/Toddler Caregiving, *Young Children*, Sep., 31-35.
- Greenberg, P., 1989 Parents as Partners in Young Children's Development and Education: A New American Fad? Why Does It Matter? *Young Children*, May, 61-75.
- Hoskins, M. L., 1999 Worlds Apart and Lives Together: Developing Cultural Attunement, *Child & Youth Care Forum*, 28(2), 73-85.
- Johnson, C., Ironsmith, M., Snow, C. W., & Poteat, G. M., 2000 Peer Acceptance and Social Adjustment in Preschool and Kindergarten, *Early Childhood Education Journal*, 27(4), 207-212.
- Kaiser, B., & Rasminsky, S. J., 2003 Opening the Culture Door, *Young Children*, July, 53-56.
- Kieff, J., & Wellhousen, K., 2000 Planning Family Involvement in Early Childhood Programs, *Young Children*, May, 18-25.
- Koch, K. P., & Mcdonough, M., 1999 Improving Parent-Teacher Conferences through Collaborative Conversations, *Young Children*, March, 11-15.
- Korat, O., 2001 Cultural Pedagogy and Bridges to Literacy: Home and Kindergarten, *Early Childhood Education Journal*, 28(4), 225-230.
- Lahman, M. K. E., & Park, S., 2004 Understanding Children from Diverse Cultures: Bridging Perspectives of Parents and Teachers, *International Journal of Early Years Education*, 12(2), 131-142.
- Milstein, G., & Lucic, L., 2004 Young Immigrants: A Psychosocial Development Perspective, *ENCOUNTER: Education for Meaning and Social Justice*, 17(3), 24-29.
- ノイゲバウエル 谷口正子・斉藤法子 (訳) 1997 幼児のための多文化理解 明石書店 (Neugebauer, B., 1992 *Alike And Different: Exploring our Humanity with Young Children*. The National Association for the Education of Young Children.)
- Olsen, L., & Mullen, N. A., 1990 Embracing Diversity: Teachers' Voices from California's Classrooms. In J. O. Edwards(Ed), *California Tomorrow*.
- Pulido-Tobiasen, D., & Gonzalez-Mena, J., 2005 Learning to Appreciate Differences, *Early Childhood Today*, 20(3), 44.
- Rhonda, H., 1999 Making Positive Multicultural Early Childhood Education Happen, *Young Children*, Sep., 39-42.
- Saracho, O. N., & Spodek, B., 1995 Ch.11 The Future Challenge of Linguistic and Cultural Diversity in the Schools. In E. E. Garcia, B. McLaughlin, B. Spodek, & O. N. Saracho(Eds.), *Meeting the Challenge of Linguistic and Cultural Diversity in Early Childhood Education: Yearbook in Early Childhood Education*, Volume 6, New York: Teachers College Press, 170-173.
- Shu-Minutoli, K., 1995 Ch.8 Family Support: Diversity, Disability, and Delivery. In E. E. Garcia, B. McLaughlin, B. Spodek, & O. N. Saracho(Eds.), *Meeting the Challenge of Linguistic and Cultural Diversity in Early Childhood Education: Yearbook in Early Childhood Education*, Volume 6, New York: Teachers College Press, 121-140.
- Wardle, F., 1998 Meeting the Needs of Multiracial and Multiethnic Children in Early Childhood Settings, *Early Childhood Education Journal*, 26(1), 7-11.
- Wise, S., 2002 Parents' Expectations Values and Choice of Child Care: Connections to Culture, *Family Matters*, 61, 48-55.
- 伊藤美保・中村安秀・小林敦子 2004 在日外国人の母子保健における通訳の役割 小児保健研究 第63巻 第2号 249-255.
- 内多允 2002 存在感を高める米国のヒスパニック 名古屋文理大学紀要 第2号 49-56.
- 管田貴子 2005 アンチバイアス・カリキュラムの理論とプログラムに関する研究 中国四国教育学会教

- 育学研究紀要 第50巻 278-283.
- 渋谷恵 2006 序章 乳幼児をとりまく多文化的状況  
山田千明（編著）多文化に生きる子どもたち 明石書店 11-31.
- 中村安秀 2003 在日外国人子育て支援 小児保健研究 第62巻 第2号 193-197.
- 廿日出里美 2006 第Ⅲ部 第1章 異文化間接触の文化化構造 山田千明（編著）多文化に生きる子どもたち 明石書店 206-232.
- 松尾知明 2006 第Ⅲ部 第1章 乳幼児期からの異文化間教育とは 山田千明（編著）多文化に生きる子どもたち 明石書店 188-205.
- 山田千明 2006 はじめに 山田千明（編著）多文化に生きる子どもたち 明石書店 3-6.  
(主任指導教員 七木田 敦)

